



いま 現在を生きる

アコーディオンの楽しさ伝えたい

なるさわゆみさん (東町)



1年前に当別に転入し、道内でも珍しいアコーディオン奏者として、町内外で活動の場を持ち、多くの人に音楽の楽しさを広めている。

アコーディオンが奏でるジャンルは広く、懐メロ、民俗音楽、ジャズ、シャンソン、クラシックなど一台であらゆる音楽を弾きこなしている。



「当別に住むことになるとは夢にも思っていませんでした。これも何かの縁だったんですね。去年の5月頃にたまたま主人の仕事の都合で家探しをしていたんです。ピアノの音などが、ご近所に迷惑にならない札幌近郊の一軒家を探しているうちに当別に住もうということに落ち着きました。アコーディオンがあるおかげで、当別でもすぐにたくさんの方と知り合うことができました」と笑う成沢さんが、当別に転入して1年が経ちました。

演奏の依頼を受け何度か当別に足を運んだことはあったものの、そこが当別だと知っていたわけではなく、札幌から近いけどずいぶん橋を渡るところだなあと感じていた成沢さんが、当別と意識したのは、コーラスをしている友人に誘われた昨年2月のふくろう展のコンサートにギターと三線（沖縄の楽器）アコーディオンのグループで演奏したときだったと振り返ります。

「ふくろうの会の方たちと親しくしてもらい、当別っていいとこだなあとという印象でした」

ピアノやエレクトーンなど何でも弾きこなす成沢さんが本格的にアコーディオンを弾くようになったのは7年前から。鍵盤はお手の物だが、左側につく伴奏用のベース&コードボタン（120個）はさすがに難しく道内でアコーディオンプロとして活躍している先生に教えてもらいながら、すぐに自分のものに。

「以前から音色も好きだったんですが、いろんなことができる可能性がわかったときにやってみたくなりました。やり始めたらアコーディオンの虜になってしまいました」

ヨーロッパでは、大学にアコーディオン科もあり、クラシックから民俗音楽、ジャズ、シャンソンと実にジャンルが広く昔から親しまれた楽器だそう。日本ではアコーディオン奏者の小林靖宏（coba）さんがコマーシャル演奏などでイメージアップしてくれて、若い人たちがアコーディオンに対する見方が変わってきたと言います。

当別に越したばかりの昨年8月には、ロシアの片田舎が舞台の音楽舞踊劇に、役者さんに混じってアコーディオンを弾くというキャストिंगでサハリン公演に出演しました。歌と踊りが入る部分は全て成沢さんのアコーディオン演奏で行われ、とても盛況でした。週5日札幌に練習に通う日々が続き大変だったというものの、充実感でいっぱいの仕事だったようです。

当別では、今年のふくろう展と合わせて行った「童謡唱歌を歌いましょう」のステージで、懐かしい音色で曲を弾き、参加者は気持ちよく歌っていました。

また、夏至祭には、ギター仲間などとステージを繰り広げ観客を魅了したほか、フォークダンス曲もアコーディオンで生演奏するなど、フォークダンスサークルの方からも感激されました。

「当別では是非学校でも演奏したいと思っています。子供たちが生の音楽に触れて、将来なにか音楽を自分のライフスタイルに取り入れたいときの入り口になればいいなと思っているんです」と話す成沢さんは、当別のアコーディオン奏者として、これから町内外で素敵な音色を楽しませてくれることでしょう。